KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

二つのキッシンジャー像：「デタント」推進派の中心人物に関する研究動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): アメリカ外交, 米欧関係, デタント, キッシンジャー, 冷戦 キーワード (En): 作成者: 吉留, 公太 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006145

関西外国語大学 研究論集 第92号（2010年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.92 (September 2010)

二つのキッシンジャー像

――「デタント」推進派の中心人物に関する研究動向[1)]――

吉　留　公　太

要　旨

Jeremi Suri, *Henry Kissinger and the American Century* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2007).
Mario Del Pero, *The Eccentric Realist: Henry Kissinger and the Shaping of American Foreign Policy* (Ithaca; London: Cornell University Press, 2010).

ジェレミー・スリとマリオ・デル・ペロの上掲書を中心に、キッシンジャー米国元国務長官の外交政策やデタント（Détente）についての研究動向を検討する。スリやデル・ペロの研究は、キッシンジャー論やデタント研究に文化史的・社会史的視点を導入した点で注目される。両者はこの視点を通じて、米ソ間のデタントを推進した既存の政治勢力と新しい社会勢力との対抗関係を指摘している。論争点としては、スリがキッシンジャーの政治行動とドイツ生まれのユダヤ難民としての経験の結びつきを指摘するのに対し、デル・ペロは冷戦の論理やアメリカの知的環境がキッシンジャーの政治行動に与えた影響を重視している。本論は両者の論争を踏まえて、米ソ主導のデタントへの対抗勢力を議論する際に、各国での市民運動を担い手とする新しい社会勢力の台頭を指摘するだけでは不十分であり、米欧間の緊張関係も考慮する必要性があると主張するものである。

キーワード：アメリカ外交、米欧関係、デタント、キッシンジャー、冷戦

１．はじめに

大量破壊兵器拡散問題は冷戦後の国際関係における最重要課題の一つである。この問題について、オバマ大統領は「プラハ演説」（2009年４月）で核軍縮と核不拡散条約（NTP）体制の強化によって対処することを提案し、ブッシュ前政権期に目立った軍事力偏重の姿勢を見直すのではないかとの期待が高まっている。

オバマ政権による核軍縮提案の起源のひとつは、フォード元大統領、キッシンジャー元国務長官、スコウクロフト元国家安全保障問題担当大統領補佐官らによる政策提言である[2)]。かつ

て、1960年代から70年代にかけて「デタント」を推進した彼らは、ソ連に対して「絶対的」な優位に立つことを至上目的とせず、また、アメリカ的価値観を世界中に浸透させることよりも、大国間交渉を活用した国益の維持を優先させていた。現在も同じ姿勢から、アメリカが大量破壊兵器削減の先導者となることで望ましい戦略的環境を創出できると主張している[3]。彼らは、ブッシュ前政権や「ネオ・コン」(Neoconservative) の唱えた「単独主義」路線と過剰な軍事力行使がアメリカの安全と世界秩序を揺るがすものと危惧している。

近年、デタントを司った有力者の意見に注目の集まる理由は二つある。第一に、当時のアメリカが抱えていた外交政策課題と現在のそれが似ているからである。その課題とは、アメリカの力に翳りが見えていながらも超大国としての地位を維持し、同時に、多極化する国際情勢を統制することにある。

1960年代から70年代にかけて、アメリカがヴェトナム戦争の泥沼に足を取られていた一方で、欧州諸国や日本などは本格的に経済力をつけ始め、「第三世界」諸国は自己主張をより強めていた。現在も、景気低迷にあえぐ先進諸国と対照的な中国やインドの経済成長、イランや北朝鮮の核疑惑、イラクやアフガニスタン情勢など、アメリカの力の低下と世界の多極化の例証には事欠かない。それゆえ、現在の外交政策担当者たちが政策課題を解決する手掛かりを求めて、デタント期の有力者の意見に耳を傾けても不思議ではあるまい。

第二に、1990年代に盛んであった「単独主義」と「多角主義」との論争のような外交原則や倫理の議論を回避して、国益確保のための具体的手段を模索することに関心が集まっているからである[4]。その要因は、外交原則を政策化することに伴うジレンマにある。

この具体例として、核拡散問題を挙げることができる。「多角主義」を掲げてアメリカが世界各国と核拡散防止に努めることは望ましいけれども、その代償としてアメリカの戦略的柔軟性を制限しようとする政策担当者はいないだろう。また、「単独主義」を主張することでアメリカの核戦力拡大を正当化させられるかもしれないが、他国の核開発も誘発しかねない。デタント期の有力者による具体的政策提言は、外交原則の政策化につきまとう上記ジレンマを回避しており、政策担当者にとっては理解しやすく、かつ、リスクの少ない選択肢を提示しているわけである。

こうした時代状況と史料公開の進展とが相俟って、デタントに関する学問的再検討も進んでいる[5]。とりわけ、次のような論点について研究の進展がみられている[6]。なぜ、反共主義の旗手であったアメリカがソ連や中国との交渉を容認する外交政策の修正を行ったのか。その修正は冷戦構造全体を変化させたり、冷戦の終焉を促したりしたのか。あるいは、デタントは冷戦政策の「修正」ではなく戦術的な調整に過ぎなかったのか、などである。

本論が取り上げるキッシンジャー元国務長官は、アメリカ主導のデタントを構想した中心人物であり、彼に関する研究の進展はデタントの定義や史的解釈を変化させる可能性を持ってい

る。デタント研究の主要動向は別の機会に整理するとして、少なくともキッシンジャー研究については、概ね次の三つの視点から議論がなされていると言えるだろう。

第一に、キッシンジャー個人の思想よりも国際関係における合理的行為者としてのアメリカを重視して、デタントをめぐる国家間権力関係を把握しようとする視点である。第二に、キッシンジャーを筆頭にデタント期の政策担当者の伝記的史実を検討することで、デタントの思想史的起源に迫ろうとする視点である[7]。第三に、従来の国家間権力関係分析や伝記的研究を見直す目的で、社会的・文化的文脈の分析も取りこんでキッシンジャーの政策意図やデタントの動態を再検討しようとする視点である[8]。

これまでは第一と第二の視点による研究が盛んであったが、近年、第三の視点によるキッシンジャー論が登場しつつある。この背景には、先述の国際政治状況の変動に加えて、国際関係理論分野での「英国学派」や「構成主義」の盛り上がり、政治史分野でのデタント研究の進展、そして、国際秩序論分野における「帝国」と「デモクラシー」との関連についての議論の蓄積などを指摘することができるであろうう[9]。これらに共通する問題関心は、まず国際秩序においてルールやイデオロギーの果たす役割を把握することであり、次に民主主義の旗手としてのアメリカと覇権的な大国としてのアメリカという二面性の調和を模索することであろう。この双方の問題解決の手掛かりを求めて、かつて類似の課題に直面した「人物」としてキッシンジャーに、そして、類似の課題に対する一つの「政策」としてデタントに再び注目が集まっている[10]。

それでは、第三の視点によるキッシンジャー論やデタント研究は、国際秩序の在り方やアメリカ外交についてどのような示唆をしているのであろうか。また、第一の視点や第二の視点とどのように異なった歴史解釈を展開しているのであろうか。そこで本論は、近年刊行されて注目を集めているジェレミー・スリ（Jeremi Suri）とマリオ・デル・ペロ（Mario Del Pero）のキッシンジャー論を比較することで第三の視点の具体的内容を検討しつつ、アメリカ外交政策論争の現状とデタント研究の動向を把握する手掛かりを得ようとするものである。

2．ドイツ出身のユダヤ人としてのキッシンジャー

はじめに取り上げるのは、スリのキッシンジャー論である[11]。スリは前著に引き続いて、伝統的な外交史のアプローチにとどまらない、文化史や社会史的要素に目配りした議論を展開している[12]。なぜなら、20世紀における世界的な社会変動という文脈を理解しない限り、キッシンジャー外交の全体像を把握することは難しいと判断しているからである。様々な文脈を重ねてスリが迫ろうとするのは、キッシンジャーが個別の政策によって「何を」したではなく、「なぜ」そうしたのかである[13]。

「なぜ」を解明する鍵となるのは、20世紀の社会変動を「グローバリゼーション」の過程と

みなす視点である。ここで「グローバリゼーション」とは、異なった社会の思想、個性、制度の相互浸透と定義される[14]。「グローバリゼーション」の象徴的事例として、キッシンジャーの個人史とアメリカの国際的地位向上との結び付きが論じられてゆく。言い換えると、スリはキッシンジャーの経験と20世紀におけるアメリカの国際的地位の向上とを「グローバリゼーション」の過程そのものであると理解している。

この上でスリは、世界各地での社会変動やアメリカの民主主義的価値観への配慮を欠いていた点を批判しつつも、キッシンジャー外交の持つ現代的意義を重視している。その拠り所となっているのは、1）20世紀国際関係史とキッシンジャーの個人史との結び付き、2）異なる社会の間を取り持ってアメリカの力に変換させることのできるキッシンジャーの能力、3）イデオロギーを過度に重視したブッシュ前政権の外交政策が失敗した結果、キッシンジャー的な外交構想以外に選択肢が存在しないこと、である。それでは、具体的に論旨を検討してみよう。

1）20世紀国際関係史とキッシンジャーの個人史

キッシンジャーは、ユダヤ系ドイツ人の両親のもとに1923年に生まれ、ワイマール共和国からナチス政権への体制移行期のドイツ・バーバリア地方で少年時代を過ごした。両親とともに1938年にアメリカに逃れてくるまでのドイツで生活は、キッシンジャーの人格形成だけでなく政治信条の形成にも重要な影響を与えたと解釈されている。

スリによればワイマール共和国は先進的な民主主義体制を整備していたが、その体制に挑戦する勢力への対処は不十分であった。ワイマール体制下の人々は、民主主義体制やユダヤ人の人権を擁護するために組織的抵抗をすることに失敗し、人種的偏見も修正することなく次第に自己保身に逃げ込んでいった。かくして、反ユダヤ主義が吹き荒れ、ついにはナチスによる政権掌握を許した。ワイマール体制の崩壊を目撃したキシンジャーは、大衆社会や過度な民主主義に否定的な評価を下し、むしろ極論を抑制できる成熟した指導者の必要性を痛感するようになる[15]。

ニューヨークに難民として逃れた後も、キッシンジャーは上記「教訓」を再確認する機会を得ることになる。それはアメリカ陸軍の若手将校の一員として第二次世界大戦で獲得したドイツ占領地を事実上統治する経験であった。キッシンジャーは担当地における秩序の安定と最低限の市民生活の復活とを優先させ、非ナチ化や民主化を副次的なものとして占領統治を指揮した。この方針は現地の情勢に合致し、少ないコストでの占領統治の開始を可能にした[16]。秩序安定と成熟した指導者を重視するキッシンジャーの占領構想は、後に宰相となるアデナウアーへの高評価に結び付いていく。

キッシンジャーの持つ大衆社会や民主主義への懐疑と優れた指導者への憧憬は、ワイマール期におけるユダヤ系ドイツ人の知的環境によっても醸成されていた[17]。当時のユダヤ系ドイツ

人は、ゲルマン系ドイツ人との血縁関係を密接にする代わりにドイツ的教養を高めることでドイツ国家へのアイデンティティーを涵養していたのである。当時のこの文脈の中で、キッシンジャーはドイツの人文哲学に対する深い造詣を通じた人格の陶冶（*Building*）を求められ、「偉大」な存在への憧れを抱いていったのである。

そのキッシンジャーが逃れたアメリカは、第二次世界大戦を契機としてヨーロッパとの結び付きをより強めてゆく。特に、ヨーロッパ戦線はアメリカの本土防衛に直接関係ないにもかかわらず、第二次世界大戦の帰結を握る戦場となった。戦後もヨーロッパは冷戦の最前線であり続け、アメリカは大西洋同盟を通じて欧州問題へより深く関与するようになる。

米欧関係の緊密化に呼応するかのように、アメリカ国内ではヨーロッパとの文化的紐帯を重視する議論が第二次世界大戦前後から盛り上がりを見せ、これまでのワスプ（WASP: White Anglo-Saxon Protestant）による文化的支配に変わって、「ユダヤ＝キリスト教」（Judeo-Christian）文化による異教徒や異エスニック集団間の連帯を強調するようになった。このような動きはアメリカ連邦政府の政策にも反映され、第二次世界大戦中の米軍の礼拝行事はプロテスタント、カトリック、そしてユダヤ教の三宗派合同で行われるようになったという[18]。

このように、キッシンジャーを含むユダヤ系アメリカ人の社会的地位は相対的に向上し始めていた。ユダヤ系アメリカ人側から見ても、アメリカは無くてはならない存在となっていた[19]。アメリカは彼らに安住の地を提供したばかりでなく、ナチス・ドイツと戦うことのできる国であり、また、第二次世界大戦後建国されたイスラエルの守護者的存在となったからである。

まとめると、20世紀はナチや共産主義という極端なイデオロギーの吹き荒れた時代であり、秩序の維持と安定とがキッシンジャーにとって最も重要な政治目標となった。第二次世界大戦と冷戦によってアメリカの国際的地位が飛躍的に上昇する中で、キッシンジャーの社会的活躍の場も広がり、彼の政治目標はアメリカの国益とも徐々に合致してゆくのである。

2）知的ネットワーク作りとキッシンジャーの才覚

戦前のドイツ社会でも、難民として辿り着いたアメリカ社会でも、ユダヤ人であることを理由に「他者」として扱われていたキッシンジャーは、ドイツとヨーロッパに関する知識を評価されてアメリカで活躍の場を広げてゆく。その舞台は、先述のアメリカ陸軍での任務であり、続いて除隊後入学したハーバード大学であった。

キッシンジャーがハーバード大学政治学部に入学したのは1947年であり、アメリカの大学は転換期に入っていた。大学教育の在り方がエリート教育のための古典教養偏重型から、連邦政府の外交政策立案に資する実務的研究を重視する「冷戦大学」型へと変化し始めていたのである[20]。特に、キッシンジャーの入学した当時のハーバード大学は「冷戦大学」への転換の先頭を走っていた。

大学環境が変化した要因には、冷戦の深刻化、冷戦に対応した実務家を求めるアメリカ連邦政府の政策、連邦政府による大学への補助金の大幅な増加があった。これを受けてハーバード大学も、従来のエリート層だけでなくユダヤ系を含めた復員した白人兵士に門戸を開き始めていた。また、復員兵の世代は「冷戦大学」の知的環境に適合していた。これまでの18歳を一般的な入学年次とした世代とは違い、復員兵の世代は相対的に成熟していて実学重視の傾向を持っていたからである。こうした環境がキッシンジャーを始めとするユダヤ系知識人に活躍の場を与えたのである。

キッシンジャーは、反共主義者であり政策提言型の研究を志向していたウイリアム・エリオット（William Elliot）教授に見出され、頭角を現してゆく。エリオットによる指導の下、キッシンジャーはドイツ時代以来親しんできた政治哲学の研究を深めると同時に、大学院に進むと「国際セミナー」（The International Seminar）や「防衛セミナー」（The Defense Seminar）の事務局を統括するようになる。特に、「国際セミナー」での活動を通じてキッシンジャーはネットワーク形成能力を開花させた。

「国際セミナー」はフォード財団やCIAなどが資金を提供しており、アメリカとその同盟諸国の結束を強化するために、共通の国際情勢認識を形成することを目的としていた。アメリカ側からはエレノア・ルーズヴェルト、ジョン・F・ケネディ、ディーン・アチソンなどが参加し、各国からは、ベルギーのレオ・ティンデマンス、マレーシアのモハメド・マハティール、中曽根康弘などが参加した[21]。キッシンジャーは参加者との交流を通じて、国際的な知己を得るだけでなく、アメリカ国内において自己の影響力を発揮する足場を築いていったのである[22]。

キッシンジャーは博士課程を修了すると「国際関係センター」（The Center for International Affairs）付き教員としてハーバード大学に残り、1950年代には「封じ込め」政策への対案を提示して注目を集めた。キッシンジャーは「封じ込め」政策と従来型のアメリカ外交思想との相関関係を見出し、その問題点を指摘したからである。外交思想について批判したのは、「アメリカ例外主義」に象徴される過剰な自己正当化と、欧州大陸からの地理的距離を拠り所として自己の武装に専念する「孤立主義」であった。その上で、キッシンジャーが政策面で批判したのは、「封じ込め政策」の前提にアメリカと他の大国との地理的距離への過信があることと、その過信に依拠して一方的な軍拡による国益擁護を可能と考える発想であった。キッシンジャーは、「封じ込め」政策が交渉の可能性を始めから排除していることに警鐘を鳴らし、その転換を求めたのである[23]。

キッシンジャーの議論の特徴は、アメリカの力の可能性ではなくその「限界」を強調することにあった。なぜなら、核時代において地理的な距離は意味を持たず、アメリカが軍事力に過剰に依拠すれば敵も軍事力を使わざるを得ない状況に追い込むからであった。しかも、敵も核武装しているから、敵の軍事力行使を誘発するような外交政策は自殺行為に等しくなる。

かくして、1950年代にキッシンジャーの唱えた戦略はイデオロギー的に完全な勝利を追求するのではなく、国際秩序の安定と勢力均衡を通じてアメリカの国益の確保を目指すものだった。大国間交渉もその手段として是認された。ただし、キッシンジャーは一方的な譲歩や交渉を主張したわけではい。むしろ、アメリカに優位な国際情勢を形成して第三世界におけるソ連の伸張を抑えるために、限定的な核兵器の使用すら主張したのである[24]。このような硬軟入り混ぜた主張についてアイゼンハワー大統領などは一目置いていたが、具体的な政策として採用することはなかった[25]。

しかし、キッシンジャーは1950年代後半に入ると政界の有力者であったネルソン・ロックフェラー（Nelson Rockefeller）上院議員（共和党）の外交政策アドバイザーになり、政策形成過程により近づいてゆく。1964年と68年の大統領選挙にロックフェラーが出馬すると、キッシンジャーの言動は本格的に世論の注目を集めるようになった。ロックフェラー議員やキッシンジャーの外交戦略構想は、大西洋同盟の強化、多角化する国際情勢に対応するため中国などとの交渉開始、そしてアメリカと西側を頂点とした階層的な国際秩序の維持であった[26]。

ロックフェラー議員は1968年に大統領選挙の共和党予備選挙で敗退し、事実上大統領選挙への挑戦をあきらめることになる。しかし、同じ予備選を制して共和党大統領候補となったニクソンはキッシンジャーを外交政策アドヴァイサーとして迎え入れて重用した。ニクソンは大統領選挙本選で当選すると、キッシンジャーを国家安全保障問題担当大統領補佐官に任命した。さらにキッシンジャーは1973年から国務長官も兼任し、文字通りアメリカ外交を統括する地位を確保したのである。

3）「選択肢」としてのキッシンジャー外交

スリは、ホワイトハウス時代のキッシンジャーの業績について主に次の三点について評価を下している[27]。それらは、ヴェトナム問題、第三世界と民主化の関係、そして中東政策である。

第一に、ヴェトナム問題はホワイトハウス入りする前からキッシンジャーのアメリカ政界における地位を確実にするために役立っていた。その背景には、ヴェトナム戦争に象徴されるアメリカの冷戦政策の行き詰まりがあった。

キッシンジャーは独自のネットワーク能力を発揮して、1960年代半ばから北ヴェトナムとのバック・チェンネル交渉の可能性を模索し始めていたのである。ジョンソン大統領もキッシンジャーに接触し協力を要請していた。ところが、キッシンジャーはアメリカ大統領選で共和党候補を支持しており、風見鶏ぶりが批判の対象となる。例えば、セイモア・ハーシュ（Seymour M. Hersh）らは、1968年のヴェトナム和平に関するパリ交渉の失敗の要因をキッシンジャーによる共和党陣営への交渉内容のリークに求めている[28]。キッシンジャーがジョンソン政権と北ヴェトナムとの交渉内容を共和党側に流し、そのためにアメリカ国内で政治論争

の争点となってしまい、結果的にパリ交渉を破綻させたという主張である。

スリはこの件についてキッシンジャーを弁護している。曰く、キッシンジャーはアメリカのグローバル戦略の構築に貢献するために行動したのであり、戦略構築の効率性を追求してアメリカの与野党両勢力とコンタクトしていた。パリ交渉失敗の理由は南ヴェトナムの自己保身や、任期末期の大統領と交渉したくないという北ヴェトナムの判断に求められるべきという[29]。

同様の議論は、キッシンジャーがホワイトハウス入りした後のヴェトナム政策にも向けられる。まず、ヴェトナムからの米軍撤退についてスリは失敗であったと判断している。なぜなら、南ヴェトナム政権崩壊の際のアメリカ大使館脱出劇などは、結局のところアメリカの権威を失墜させ、アメリカにとって有利な形に戦況を変化させられなかったからである[30]。しかし、スリの批判は戦略家としてのキッシンジャーの狙いを汲み取って、その狙いと結果とのずれを問題にするに留まっている。それゆえ、キッシンジャーがカンボジアやヴェトナムなどで「戦争犯罪」を犯したとの解釈とは一線を画している[31]。

インドシナ半島とキッシンジャーとの関係は現在に至るまで論争の的であり、スリの解釈についても議論の余地があるだろう。特に、キッシンジャー個人の意図と実際の政策との乖離をどのように整理するのかについては課題が残る。この点については後に触れることにしたい。

第二に、アメリカと第三世界諸国との連携について、中国、チリ、南アフリカなどの事例を成功であったとスリは評しつつも、キッシンジャー外交に一定の批判を加えている。

第三世界諸国は国内に深刻な人権抑圧問題を抱えていたから、アメリカによる連携強化の動きは国内外から批判されてきた。例えば、ヘンリー・ジャクソン（Henry Jackson）上院議員のデタント批判、アムネスティー・インターナショナルなどの人権擁護団体の発足、1975年の全欧安全保障会議（CSCE）「ヘルシンキ議定書」の人権条項への関心の高まり、ソ連の人権状況に対する国際的批判などはキッシンジャー外交への反発の現れであった[32]。

しかし、キッシンジャーは人権重視の議論を「孤立主義」として退け、高まるデタント批判の世論に耳を傾けることはなかった[33]。スリはこうしたキッシンジャーの態度には批判的であり、キッシンジャーを「革命的な戦略家であったけれども、保守的な考えの持ち主でもあった」と評している[34]。ドイツ観念論に影響を受けたキッシンジャーは、戦略的な政治家と大衆社会から孤立した政治家という二面性を抱えており、その収斂には失敗したわけである。

これとは対照的に、スリは中東政治にキッシンジャーの果たした役割を相対的に高く評価している[35]。ブッシュ前政権の外交政策やそれによってもたらされた中東情勢の混乱と対比して、キッシンジャーの手がけたような安定と現地リーダーとの交渉を重視する外交を支持しているからである。加えて、キッシンジャーによって今日に至る中東情勢の骨格が形成されたともスリは主張する。その論拠として挙げられているのは、まず、中東におけるソ連の影響力を後退させてアメリカの影響力を増大させることに成功した点であり、次に、サウジアラビアやエジ

プトなど現地のリーダーとアメリカとの密接な関係を築いた点である。

もちろん、中東に関するキッシンジャー外交の負の遺産も指摘されている[36]。アメリカと結び付いた現地リーダーは長期政権を維持するだけでなく、それに反発する勢力への抑圧を組織的に行っていた。そのため人々は将来への希望を失い、テロに身を投じるようになる。人々の反発は国内政治体制だけではなく、その背後にあるアメリカに対しても向けられることになり、テロリストはアメリカを標的とするようになるという。

4）小括

これまでの議論をまとめておきたい。スリのキッシンジャー論は国際的社会変動とキッシンジャーの個人史との連関という視点を本格的に導入している。この視点は、既存の研究に見られた他の外交戦略家との対比からキッシンジャーを称揚する議論を乗り越えることを可能にしている。また、ヨーロッパの知的伝統がアメリカに接受された過程や、アメリカの社会変動の中からキッシンジャー外交やデタントが生み出された過程が説得力を持って議論されている。

しかし、スリの研究は先行研究とは違った視点を提示することに成功しているものの、議論の中身にはいくつかの問題点も残されている。ここでは以下の三点について触れておきたい。

第一に、ドイツ出身のユダヤ人としての経験と、政治家としてのキッシンジャーの行動のずれをいかに説明するのかという問題がある。

まず、ドイツ出身のユダヤ人としての経験を強調するならば、その政治信条には明確な優先順位があるはずである。つまり、最重要「目的」はナチスのような独裁政権の登場を防ぐことであり、その「手段」としてイデオロギーへの過剰な依存を戒めるという順番になろう。

けれども、アメリカで政治家となったキッシンジャーは必ずしもこのような論理に基づく行動をしたわけではない。政治家としてのキッシンジャーは、一方でイデオロギーよりも国際秩序の安定を重視して米ソ交渉に代表されるデタント外交を主導した。他方で、アメリカの国益確保のために各地の独裁者との連携を深めた。ゆえに、独裁を嫌悪するはずのドイツ出身のユダヤ人がアメリカの国益のためには独裁者とも連携するという矛盾を抱えていた。矛盾が生じた理由を説明するには、アメリカの知的環境や冷戦の文脈における外交上の計算といった、ドイツでの経験以外の要因を吟味する必要が出てくるだろう。

また、政治家としてのキッシンジャーの業績に対する評価と、キッシンジャーの意図を重視する説明との間に整合性を保てるのかという疑問も残る。ドイツ哲学に通じたキッシンジャーに対してマックス・ヴェーバー（Max Weber）の「責任倫理」を持ち出すまでもなく、政治の場における評価は政治行為の結果に対して行われるものであり、「心情倫理」（心情や動機の純粋さ）は二義的な問題である[37]。しかし、スリの議論はしばしば後者を重視しており、政治行為の結果に対する評価を曖昧にするという問題を抱えている。

ヴェトナム問題を例に取り上げてみよう。スリは1968年のアメリカ大統領選挙前後におけるキッシンジャーの風見鶏的な動きについての様々な批判や、「戦争犯罪」者としてキッシンジャーを糾弾する主張を斥け、むしろキッシンジャーを擁護している[38]。スリの論旨は次のようにまとめられる。キッシンジャーのヴェトナム政策は、結果的にアメリカの国益を確保することに失敗した。しかし、戦略家としてのキッシンジャーは国益や国際情勢の安定を考えて行動していたのであり、その手段に対するアメリカ国内世論の反応には関心を持っていなかったという。すると、スリは一方で、アメリカ国内政治や倫理的問題についてはキッシンジャーの個人的信条から評価を下し、他方で、国際政治問題については国際的権力関係から評価を下していることになる。しかも、どの状況でどちらの説明論理を用いるのかについては著者の裁量によって決められており、基準は明示されていない。

同じ問題は、スリによるキッシンジャー外交への評価とデタントに対する評価の「ずれ」ももたらしている。スリは前著において、1960年代に各国で沸き起こった大衆運動に対する権力者側の言わば「反動」としてデタントをとらえており、デタントのエリート主義的、非民主主義的側面を批判するとともに、冷戦を長引かせた一要因しても指摘している[39]。ところが、近著においてスリはデタントを推進した中心人物であるキッシンジャーについて、ドイツ時代での経験から培った政治信条を一貫して維持していたという本人の説明を受け入れて、相対的に好意的な評価を下している。

繰り返しになるが、ドイツ出身のユダヤ人としての経験から政治判断を下すのであれば、独裁者との妥協は最も嫌悪すべき選択であろう。それゆえ、ドイツでの経験とキッシンジャーの政治信条を結び付ける解釈には疑問が残る。

そもそも、1923年生まれのキッシンジャーがドイツで生活したのは1938年までであり、年齢にすると15歳までである。キシンジャーは15歳になるまでに政治信条を形成していたのであろうか。仮に形成していたとしても、その政治信条と政治行動との一貫性を改めて問うべきであろう。つまり、伝記的事実に基づく心象風景分析を行うことの意義を否定するものではないが、議論に説得力を持たせるためには、心象風景から一定の客観性を保つことがより重要である。

第二に、キッシンジャーとヨーロッパの関係について、その双方向性を議論しきれていないという問題がある。キッシンジャーの人格や政治信条形成の上でヨーロッパの果たした役割については議論されているものの、その逆の関係については触れられていないという問題である。

具体的に言うと、スリはキッシンジャーの構想していた大西洋戦略やデタント外交について論じているものの、欧州諸国がそれらの構想形成に与えた影響や、キッシンジャーの主導したデタントに対する各国政治家の反応についてはほとんど触れられていない。むしろ、当時の西欧諸国の政治家とキッシンジャーは、デタントを推進することに共通の利害関係を有していたと想定されている。

しかし、近年のデタント研究で指摘されているように、アメリカの構想していたデタントとヨーロッパ同盟諸国の求めていたそれは必ずしも一致するわけではない[40]。そもそも冷戦についても、アメリカ側の抱くイメージと西欧諸国のそれとの間の「ずれ」は常に研究の対象となってきた。ある国が効率よく国際戦略を実行するためには、このような情勢認識の「ずれ」を最小限に留めることが望ましいからである。

果たして、キッシンジャーがデタントの目標としていたことと、欧州諸国の狙いは同じであったのだろうか。米欧間にデタントの進め方とその対象について緊張関係はなかったのであろうか。こうした米欧間の緊張関係は、スリのデタント解釈と整合性を持つのであろうか。スリの研究には、このような「ずれ」をめぐる政治勢力間の角逐についての解釈を提示するという課題が残されている。

加えて、デタントやキッシンジャー外交の弱点についての解釈にも疑問が残る。スリは、各地での社会変動やアメリカの国内世論動向にキッシンジャーが疎かったと説明している。しかし、ニクソン大統領やキッシンジャーは、ヴェトナム戦争に対するアメリカ国民の反感を察知していたからこそ「名誉ある撤退」をスローガンにして1968年の大統領選挙を戦ったのであり、国内世論の動向にはむしろ敏感であったと判断する方が妥当であろう。

第三に、キッシンジャーやデタントの「遺産」を過大視する問題がある。キッシンジャーの諸政策が今日に至るアメリカと中東諸国との関係や、中東情勢の構図を規定したとスリは主張している。また、前著において、アメリカとその同盟国によるデタントの動機として社会変動や世論を抑え込もうとする意図があったことを指摘しており、その結果、各国の大衆は今日まで政治的に疎外されていると論じている[41]。

しかし、1970年代から現在に至る中東国際政治の因果関係をスリの議論に従って説明できるのであろうか。イスラエル・パレスチナ陣営双方の内部分裂や核拡散問題など、キッシンジャーの想定していなかった問題が現在の中東情勢を規定していると言っても全く的外れではあるまい。また、レーガン政権登場の過程、「ネオ・コン」とブッシュ前政権（在任2001年～2009年）との結びつきなど、デタントや国際協調に対する大衆の「反動」を無視することは出来まい。かくして、キッシンジャー外交とその帰結についてより包括的視点から分析することが課題として残されている。

3.「奇矯なリアリスト」としてのキッシンジャー

次に取り上げるのは、マリオ・デル・ペロの研究である[42]。デル・ペロは、通俗的キッシンジャー像の修正を試みたという点でスリの研究を評価しつつも、次の三点に関するスリの議論に疑問を提示している[43]。一点目は、ユダヤ系ドイツ人としてのナチス時代の経験からキッシ

ンジャーの政治的知性が形成されたという主張である。二点目は、それに基づいて政治的暴力を用いる独裁者を嫌悪していたという主張である。三点目は、安定と秩序を重視した政治運営というキッシンジャーの考えは一貫しており、問題はあったにせよアメリカ外交にとって一つの新しい選択肢を提示したという主張である。

デル・ペロは、アメリカ社会やアメリカの政治的常識がキッシンジャーの政治観形成に及ぼした影響を重視しており、その逆の因果関係を否定的に考えている。つまり、キッシンジャーはドイツ出身のユダヤ人としてアメリカにとって特別な存在であったわけではなく、アメリカ社会に順応しながら出世しえた一人のヨーロッパ移民と解釈するわけである。その上でデル・ペロは、キッシンジャーとデタントに関する研究の展開を踏まえつつ、通俗的なキッシンジャー像の見直しをさらに進めるために、次の三つの論点を提示して自説を展開している。

第一の論点は、先駆的にアメリカ外交の方向性を示した傑出した知性としてキッシンジャーを解釈することの是非である。通俗的解釈は、キッシンジャーがヨーロッパ的リアリズムをアメリカに持ち込み、モラルを絶対視するイデオロギー的外交政策への対案として「現実政治」(Realpolitik) を提示した役割を評価する。この解釈を支える要素が、彼のユダヤ系ドイツ人としてのナチス時代の経験であり、伝記的研究もこうした解釈の定着に一役買っている。

デル・ペロは、1940年代から50年代にかけてのキッシンジャーの研究業績やメディアでの発言を分析することで上記の通俗的解釈を批判している。この中でデル・ペロは、核の使用の是非や地理的な重点などについて政策的なニュアンスの違いはあったものの、キッシンジャーと冷戦期の有力な知識人達の主張が概ね共通していたことや、キッシンジャーがアメリカ政府の冷戦政策を概ね支持していたことを指摘している。それゆえデル・ペロは、ドイツ出身のユダヤ難民としての経験と切り離してもキッシンジャーの渡米後の言動を解釈できると主張している。

第二の論点は、戦略家としてのキッシンジャーの欠点としてしばしば挙げられる、アメリカ的価値観や国内世論動向への無関心という解釈の妥当性である。ジョン・ギャディス (John Gaddis) らがこの解釈を妥当と主張しており、デル・ペロはそれへの反論を展開している[44]。

反論を展開するにあたって、デル・ペロはスリのキッシンジャー論に一定の評価を与えている。スリは、デタントの失敗要因をキッシンジャー個人の問題に還元せず、世論とキッシンジャーとの対抗関係に求めているからである。ただしデル・ペロは、スリの提示したユダヤ系ドイツ人としての経験を強調するキッシンジャー論とキッシンジャーの実際の行動との間にある矛盾を見逃さず、それを乗り越えようとしている[45]。

そこで、デル・ペロはロバート・ダーレック (Robert Dallek) による先行研究を参考にして、ドイツ出身のユダヤ人という要因ではなく、アメリカ国内政治の文脈からキッシンジャー外交を読み解いてゆく[46]。ダーレックは近年公開された史料から国内政治とキッシンジャー外

交の連関を論じたが、デル・ペロは公文書に加えて1960年代におけるキッシンジャーの研究業績やメディアにおけるキッシンジャーの発言についての検討も加え、より包括的に国内政治とキッシンジャー外交の結び付きを把握しようとしている。

デル・ペロはこうした検討の結果、1960年代を通じてキッシンジャーが「冷戦リベラリズム」に批判的になっていたこと、それへの対案としてデタントを構想していたことを指摘する。ここに言う「冷戦リベラリズム」とは、アメリカ文化・倫理の普遍性を前提としつつ、「封じ込め」のための高い軍事的出費をケインズ主義的経済成長の手段として受容する政策的立場である[47]。「冷戦リベラリズム」が成立するための前提は、外交政策に対する国内世論の安定した支持があることと、アメリカ大統領の望む形で国際問題を一挙に解決できる能力をアメリカが保有していることである。

キッシンジャーは1960年代になると、「冷戦リベラリズム」の前提が双方とも破綻していると判断し、代替案を模索していた。それがデタントであった。キッシンジャーはアメリカ的価値観と外交行動の指針を相対的に切り離して、国際的勢力均衡の回復を通じた国益の確保を目指したのである。つまり、国内世論やアメリカの政治文化に非常に敏感であったということをデル・ペロは主張しているわけである。

これに加えて、デル・ペロは力の「限界」に強い関心を寄せるキッシンジャーの知的傾向とデタントとが結合していたことを指摘する[48]。「限界」の認識は、一つのイデオロギーによる独占的支配を危ぶむ立場につながっている。それゆえキッシンジャーは、冷戦イデオロギーやアメリカ文化の普遍性や同質性を当然視する立場から距離を置いており、アメリカ文化を相対的存在と考えたわけである。

この「限界」認識について、スリはその首尾一貫性と政策上の効用を認めている。その上で、アメリカ文化を相対的に扱うキッシンジャーの文化観の起源を、ドイツ生まれのユダヤ人としての経験に求めている。これに対してデル・ペロは、キッシンジャーの言動を分析して、「限界」認識のご都合主義的性質を指摘している。また、相対的な文化観の起源については、国益と権力を軸として展開されるキッシンジャーの思考様式そのものにあると主張している[49]。デル・ペロは、ヨーロッパでの経験やユダヤ人としてのアイデンティティーに還元する説明から再び一線を画しているわけである。

第三の論点は、キッシンジャー外交の戦略的な優劣に関する議論である。従来は、第二の論点でも触れたようにキッシンジャー外交の戦略的卓越性を認めつつ、社会変動や国内世論への対応の不味さを問題にする議論が多かった。これに対しデル・ペロは、戦略的卓越性そのものを否定し、キッシンジャーのデタント政策に内在していた矛盾を問題としている。

その矛盾とは、冷戦によって作られた二極構造を維持することを「国益」としながらも、反共主義を「国益」として二極構造を形成・維持してきた冷戦イデオロギーから距離を置いたこ

とにある[50]。この矛盾は次の三つのジレンマを生成する。まず、二極構造の維持を試みながらも多極化を推進させてしまうというジレンマを生む。キッシンジャーがアメリカ外交の舵取りを始めた頃、既に世界は多極化しており、既存の冷戦という枠組みで多極化の制御を試みた点で彼の外交政策は国際情勢と乖離していた。このような状況を無視して二極構造を上から押し付けたゆえに、アメリカは同盟諸国や世界各国からの反発を招き、多極化を加速させてしまった。この結果、二極構造を維持するという「国益」維持も困難となる。

次に、独裁者との妥協による国益維持と冷戦イデオロギーを維持することのジレンマが生じる。キッシンジャーは二極構造の維持を優先して、ソ連や中国の指導者と交渉するだけでなく第三世界諸国の独裁者と関係を深めることを厭わなかった。しかし、独裁者との関係強化は自由と民主主義の擁護を標榜していたはずのアメリカの冷戦イデオロギーと相反していた。この結果、キッシンジャー外交に対する国内・国外からの批判を高めた。またそれは、キッシンジャーがナチスへの反省から独裁者を嫌悪していたというスリの解釈を覆す論拠も提示している。

最後に、外交政策論争の主導権を獲得しようとして、逆に論争相手を有利にしてしまうというジレンマも生じる。キッシンジャーによる米ソ交渉は、その反作用として反共主義と対ソ核抑止力を維持することへの世論からの支持を高めさせた。また、第三世界の独裁者との協調への反作用として、自由や民主主義を擁護するアメリカの役割への世論からの支持も高めた。これらの反作用は徐々に収斂されて、「ネオ・コン」が活躍する場を作り出し、反ソ反共と軍拡を唱えるレーガン政権の誕生をもたらした[51]。キッシンジャー外交は、逆説的に冷戦イデオロギーを強調する「(アメリカ) 例外主義的」で「ヘゲモニー的」政治文化を盛り上げたのである。

デル・ペロは上記の問題点を踏まえて、キッシンジャーを「革命的な戦略家」(スリ) とは見なさず、また、冷戦構造を与件としつつ合理的な行動をした現実主義的な戦略家 (ギャディス) とも考えない[52]。デル・ペロの理解するキッシンジャーは、「現実主義」を標榜しながらも二極構造の維持という非現実的目標を掲げ、そのために矛盾を抱え込んで追い詰められていった、「奇矯なリアリスト」(The Eccentric Realist) に過ぎないのである[53]。

これまでの議論を小括すると、デル・ペロは上記三つの論点について論争相手の問題点を明確に指摘しており、問題点を乗り越え得る解釈を呈示している。デル・ペロの研究はダーレックらによる史料実証を受け止め、スリらによって開拓された社会・文化史的視点によるキッシンジャー論やデタント論を批判的に発展させるものと位置づけることが出来るだろう。

このような意義を認めながらも、デル・ペロの研究にも問題点があることを指摘しておきたい。まず、デル・ペロの解釈の根拠についてはまだ不明確な点がある。例えば、先述の第二の論点で触れたキッシンジャーの文化的相対主義について、スリはドイツ出身のユダヤ人としての経験に起源を求めている。これに対して、デル・ペロはキッシンジャーの思考様式から内在

的に導かれていると考えている。スリへの批判については的を射ているが、より説得力を持たせるためには、デル・ペロのいう内在的な論理構造を読み解いて読者に提示する必要があろう。

また、第三の論点に関して紹介した「ヘゲモニー的」な政治文化の盛り上がりというような概念の取り扱い方にも留保がいるであろう。なぜなら、グラムシ的な政治分析枠組みを共有するものには説得力を持っていたとしても、それ以外の者にとっては概念レベルでの説明がなければ同意することが困難になるからである。外交史を専門とする研究者によるキッシンジャー論やデタント論の本格的な見直しを迫る意欲的な研究であるだけに、これらの点を乗り越えることが期待される。

４．研究課題

本論はジェレミー・スリとマリオ・デル・ペロの近著を手掛かりに、デタント研究とキッシンジャー論に関する学説状況の整理を試みた。双方の研究とも従来型のキッシンジャー論やデタント解釈を批判的に乗り越えようとしている点で共通している。

序論でも触れたように、キッシンジャー論やデタント解釈には大きく分けて三つの議論がある。第一に大国間の権力関係を軸にした外交史的分析、第二に伝記的事実を論拠にしてキッシンジャーの卓越性や先駆性を強調する議論、第三に社会的・文化的文脈の分析も踏まえてキッシンジャーの政策やデタントを位置付ける議論である。このうち、前二者が従来型の視点であり、スリやデル・ペロは第三の視点から議論している。

第一点目の議論について、スリはアメリカとヨーロッパの文化的・社会的交流の象徴としてのキッシンジャー像を対置し、デル・ペロは国際政治情勢全体の変動に対するキッシンジャーの対応を根拠として批判している。第二点目の議論について、両者ともキッシンジャーの持っていた思想的保守性（スリ）あるいは政策的保守性（デル・ペロ）に着目し、反論を提示している。こうして、両者は第三の視点を合理的と見なしている。

しかし、第三の視点を取るにしても、スリとデル・ペロの立場は一致しているわけではない。各論については本論に触れた通りであるが、国際関係理論分野や国際政治史分野での研究動向を反映して、デタントやキッシンジャー外交と冷戦構造の変動との関わり合いが大きな議論の対象になっている。例えば、そもそもキッシンジャーの進めたデタントは冷戦構造を変容させたのか否か、キッシンジャー外交は冷戦終焉の加速要因となったのか否か、あるいは、いわゆる「ヨーロッパ・デタント」とキッシンジャーやニクソンの構想していたデタントとの相関関係をどのようにとらえるのか、などが主な論点として挙げられよう。

スリの議論をまとめると、キッシンジャーの推進したデタントは冷戦政策を乗り越えるものではなかった。それゆえ、デタントは冷戦終焉を加速させた要因とはならない。ただし、キッ

シンジャーの戦略的思考そのものは独自で一貫していると評価しており、そこに冷戦構造変化の萌芽や現状への処方箋を提示しうる可能性を見出している。言わば、冷戦やデタントとキッシンジャーの思考を切り離すことが可能という立場である。このような分離を可能にする論拠となっているのが、キッシンジャーのドイツ出身のユダヤ人としての経験と政治信条である。

これに対しデル・ペロは、そもそもキッシンジャーの戦略家としての独自性やユダヤ人としての政治信条の一貫性を強調する解釈に疑問を投げかけている。それゆえ、キッシンジャーの思考に冷戦終焉の萌芽や現状への処方箋を見出すことはしない。また、デタントについても冷戦的な二極構造を強化したと判断し、冷戦終焉にデタントの果たした役割は小さいと見ている。

両者とも学説状況を踏まえて一定の史料実証を行っており、少なくとも今後の研究は彼らの主張を無視することは出来ないだろう。それでは、スリとデル・ペロはどのような研究課題を残しているのであろうか。各論についてはそれぞれの論旨を紹介した際に行ったので、ここでは、より包括的な研究課題を指摘しておきたい。

まず、両者ともにキッシンジャー論を文化・社会史的な文脈で位置付けることを試みているものの、国際政治史分野や国際関係理論分野におけるデタント論との関係について包括的な議論を提示するにはまだ至っていない。また、キッシンジャー論の見直しが冷戦やデタントに関する国際政治史分野での実証研究に与える影響についての検討も必要でもあろう。

両者の抱えるこうした問題を象徴的に現しているのが、アメリカとヨーロッパの関係についての解釈である。スリとデル・ペロはともに、キッシンジャー論を通じてヨーロッパの知的伝統が第二次世界大戦後のアメリカにどのような影響を与えたのかについて論じている。スリは一定以上の影響力を認めているのに対し、デル・ペロは過大評価を戒めている。両者のキッシンジャー論はヨーロッパからアメリカへの思想的流れを検討しているわけだが、冷戦認識やデタントに関する米欧間の相違について、キッシンジャー外交やアメリカのデタント政策が果たした役割を検討する必要があるだろう。

同じことは、デタント見直しについての米欧間の差異についても指摘出来るだろう。1970年代半ばから80年代初頭にかけて、米ソ間のデタントやキッシンジャー外交が批判された過程では、アメリカ国内ではより強硬な対ソ外交を求める「ネオ・コン」など反デタント派の動きが活発になっていたが、欧州では逆に「平和運動」が盛り上がるという差異が現れた。後者については冷戦構造の解体を加速させた一要因であるという解釈も存在する[54]。

つまり、キッシンジャーの進めたデタントと「ヨーロッパ・デタント」とのせめぎ合い、そして、キッシンジャー的なデタントの推進派と反デタント派の国際的な文脈での対抗関係の分析、これらが近年のキッシンジャー論の残している研究課題といえよう。

註

1）本研究は科学研究費補助金（若手研究B：課題番号21730148）の研究成果の一部である。

2）例えば、George P. Shultz, William J. Perry, Henry A. Kissinger, and Sam Nunn, 'A World Free of Nuclear Weapons', *The Wall Street Journal*, January 4, 2007, A.15; Brent Scowcroft, 'Don't Attack Saddam', *The Wall Street Journal*, August 15, 2002, A.12. フォード元大統領は2006年12月に亡くなったが、生前、イラク戦争や「単独主義」を批判していたことが明らかになった。Bob Woodward, 'Ford Disagreed With Bush About Invading Iraq', *The Washington Post*, December 28, 2006, A.1.

3）George P. Shultz, William J. Perry, Henry A. Kissinger, and Sam Nunn, 'Towards A Nuclear Free World', *The Wall Street Journal*, January 15, 2008, A.13; Shultz, Perry, Kissinger, and Nunn, 'A World Free of Nuclear Weapons'.

4）もちろん、「多角主義」も「単独主義」もアメリカ外交の選択肢として不十分という指摘もできよう。

5）米国務省によるニクソン/フォード政権期の *Foreign Relations of the United States* の刊行、米国立公文書館による「ニクソン大統領文書プロジェクト」(Nixon Presidential Materials Project)、ニクソン/フォード両大統領図書館の史料公開などがある。なお、2010年4月現在、米国立公文書館の「ニクソン文書プロジェクト」関連史料はニクソン大統領図書館に移管作業中である。The United States Department of State, Office of Historians, <http://history.state.gov/historicaldocuments/ nixon-ford>; Nixon Presidential Library and Museum <http://www.nixonlibrary.gov/>; Gerald R. Ford Presidential Liberality and Museum <http://www.fordlibrarymuseum.gov/> [All accessed on 20 April 2010].

6）R.W. スティーブンソン、滝田賢治訳『デタントの成立と変容—現代米ソ関係の政治力学』、中央大学出版部、1989年、16頁; 斎藤嘉臣『冷戦変容とイギリス外交—デタントをめぐる欧州国際政治1964～1975年』、ミネルヴァ書房、2006年、4－5頁; 川嶋周 ・『独仏関係と戦後ヨーロッパ国際秩序—ドゴール外交とヨーロッパの構築　1958－1969』、創文社、2007年; 宮脇昇『CSCE人権レジームの研究—「ヘルシンキ宣言」は冷戦を終わらせた』、国際書院、2003年; Wilfried Loth, *Overcoming the Cold War: A History of Détente* (London: Palgrave, 2002); Daniel C. Thomas, *The Helsinki Effect; International Norms, Human Rights, and The Demise of Communism* (Princeton: Princeton University Press, 2001).

7）Walter Isaacson, *Kissinger: A Biography* (New York: Simon and Shuster, 1992); Jussi Hanhimäki, *The Flawed Architect: Henry Kissinger and American Foreign Policy* (Oxford; New York: Oxford University Press, 2004).

8）Jeremi Suri, *Henry Kissinger and the American Century* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2007); Mario Del Pero, *The Eccentric Realist: Henry Kissinger and the Shaping of American Foreign Policy* (Ithaca; London: Cornell University Press, 2010).

9）Ian Clark, *International Legitimacy and World Society* (Oxford: Oxford University Press, 2007); 山本吉宣『「帝国」の国際政治学—冷戦後の国際システムとアメリカ』、東信堂、2006年。

10）ネオ・リアリズム批判を重視する解釈は　斎藤『冷戦変容とイギリス外交』、5、210頁註（14）。

11) Suri, *Henry Kissinger and the American Century*.

12) Jeremi Suri, *Power and Protest: Global Revolution and the Rise of Détente* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2003).

13) Suri, *Henry Kissinger*, p.5.

14) Ibid., p.4.

15) Ibid., pp.37-38.

16) Ibid., p.76.

17) Ibid., pp.27-28.

18) Ibid., pp.59-62.

19) キッシンジャーが渡米したのは1938年であり、アメリカに帰化したのは1943年である。

20) Ibid., pp.93, 101-105.

21) Ibid., pp.122-126.

22) Ibid., pp.124-125.

23) Ibid., pp.157-162.

24) Henry Kissinger, *Nuclear Weapons and Foreign Policy* (New York: Harper and Brothers, 1957), p.20.

25) Suri, *Henry Kissinger*, pp.143, 156.

26) Ibid., pp.167-170; Nelson Rockefeller, *The Future of Federalism* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1952).

27) Suri, *Henry Kissinger*, Chapter 5 and 6.

28) Seymour M. Hersh, *The Price of Power: Kissinger in the Nixon White House* (New York: Summit Books, 1983).

29) Suri, *Henry Kissinger*, p.190.

30) Ibid., pp.233-234.

31) Ibid., p.6.

32) ジャクソン上院議員のこの時期の活動はRobert G. Kaufman, *Henry Jackson: A Life in Politics* (Seattle: University Washington Press, 2000). Especially, Chapter 13.

33) Henry Kissinger, *Years of Renewal* (New York: Simon and Schuster, 1999), p.34; Suri, *Henry Kissinger*, p.244.

34) Suri, *Henry Kissinger*, p.248.

35) Ibid., p.257.

36) Ibid., pp.269-274.

37) マックス・ウェーバー『職業としての政治』岩波書店、1980年。

38) キッシンジャーと「戦争犯罪」については Christopher Hitchens, *The Trial of Henry Kissinger* (London; New York: Verso, 2001). スリの反論は Suri, *Henry Kissinger*, pp.6, 190.

39) Suri, *Power and Protest*, p.5.

40) Matthias Schulz and Thomas A. Schwartz eds., *The Strained Alliance: U.S.-European Relations from Nixon to Carter* (Washington D.C. : German Historical Institute; Cambridge: Cambridge University Press, 2010).

41) Suri, *Power and Protest*, p.5.

42) Del Pero, *The Eccentric Realist*.

43) Ibid, pp.6, 154 Reference No.8.

44) John Lewis Gaddis, *The Cold War: A New History* (London; New York: Penguin Books, 2005). pp.179-184; Del Pero, *The Eccentric Realist*, p.7.

45) Del Pero, *The Eccentric Realist*, p.154 Reference No.8.

46) Robert Dallek, *Nixon and Kissinger: Partners in Power* (New York: Harper Collins, 2007).

47) Del Pero, *The Eccentric Realist*, p.22.

48) Ibid., p.71.

49) Ibid., p.72.

50) Ibid., pp.9-10.

51) Ibid., pp.9-10, Chapter 4.

52) Suri, *Power and Protest*, pp.31-33; Gaddis, *The Cold War*, pp.172-174; Del Pero, *The Eccentric Realist*, pp.7, 154 Reference.No.8.

53) Del Pero, *The Eccentric Realist*, p.10.

54) Thomas, *The Helsinki Effect*; 宮脇『CSCE人権レジームの研究』。

（よしとめ・こうた　外国語学部講師）